

慶應SFC学会 成果報告書

(D.研究調査・フィールドワーク)

題名：英国発祥マギーズセンターの環境デザイン分析を通じた癌に関わる人へのケア手法の模索

氏名：中澤 希公（慶應義塾大学 環境情報学部）

1. 研究概要・背景

日本において、がんは2人に1人が罹患する国民病とされ、誰にとっても避けられない問題となっている。がん患者とその家族が直面する精神的・身体的負担は大きく、自殺率の上昇も報告されていることから、医療的なケアに加えて心理的な支援の重要性が高まっている。

その中で注目したのが、英国発祥の「マギーズセンター (Maggie's Centre)」である。がんに影響を受けるすべての人々に、予約不要・無料で開かれたサポートを提供するこの施設では、建築やガーデンといった「環境デザイン」がケアの一部として重要な役割を担っている。

本研究は、研究者自身の母親との癌による死別経験をもとに、残された人が死者との「絆」を再考するための空間のあり方を探求することを目的とする。従来の日本の死別ケア施設は閉鎖的で心理的負担が大きいという課題があるため、よりオープンでアクセスしやすい空間設計の可能性を模索する。調査対象として、マギーズセンターの空間構成、とりわけその“周囲の道”が果たす役割に着目し、日本におけるケアの空間のあり方に応用することを目指した。

2. 調査方法・フィールドワークの概要

本研究では、ロンドンにある4つのマギーズセンターを訪問した。延べ22回にわたって訪問し、施設の空間構成や利用者の行動をスケッチや記録で観察した。

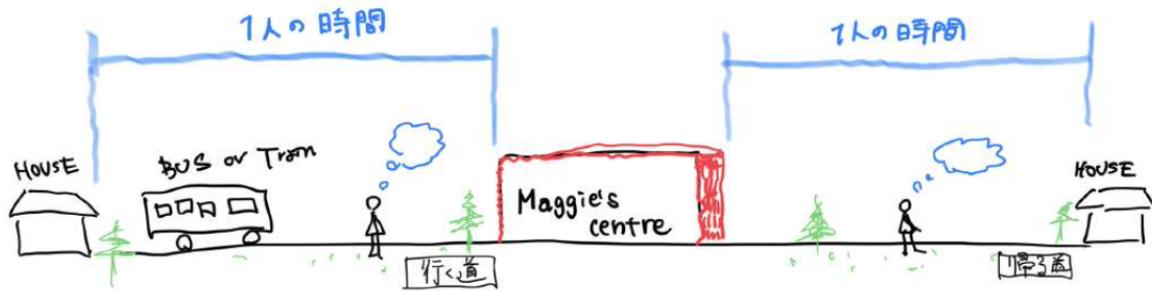


施設内では、一人称研究の手法を用い、筆者自身の体験を通して、どのような瞬間に故人とのつながりを感じるのかを記述し続けた。その結果、施設内だけでなく、施設への行き帰りの道中でこそ感情の揺らぎや自己対話が深まることが明らかになった。この「帰り道」の発見が、日本での空間提案へとつながっ

母との過去の思い出を振り返る

母という存在の認知

母との過去の思い出を振り返る



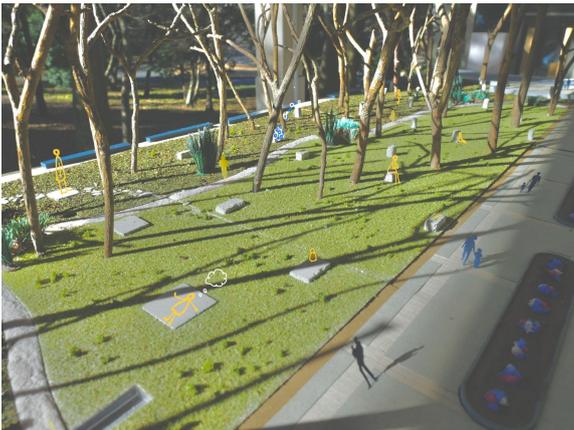
た。

3. 設計内容と成果

東京都小金井市にある子ども対象の遺族会の周辺を設計対象とした。施設からバス停までの「帰り道」に、悲しみに向き合える散歩道を設計した。

英国マギーズセンターからの帰り道の調査から抽出した7つの空間条件（例：迷わない道、泣ける場所、時間の流れを感じる場所など）をベースにゾーニング案を検討。道は一本道とし、感情に対応した「傷エリア」「空エリア」「泡エリア」などを配置。植栽の高さや風の動き、素材の冷たさなど、風景の変化に気付きやすいように工夫した。

また、制作した絵本を遺族会に設置し、利用者が自発的にその意味を読み解ける仕組みも導入した。



4. 今後の展望

本研究は、空間を通じたグリーフケアのプロトタイプとして位置づけられる。

今後は他地域の遺族会や公共空間にも応用し、多様な喪失体験に寄り添う設計の汎用性を検討していきたい。また、絵本などのアウトリーチツールを通じて、ケアの考え方をより広く社会に伝える活動も行っていく予定である。

謝辞

本研究の遂行にあたり、フィールドワークの許可をいただいたMaggie's Royal Marsdenの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、設計に関してご助言をくださった石川初先生をはじめ、制作を手伝ってくれた友人、支えてくれた家族にも心より御礼申し上げます。さらに、SFC学会からのご支援により、制作した絵本を印刷・製本することができ、それを実際にご遺族の方々のもとへ届けることができました。学会の皆様のご支援があったからこそ、この研究が「形」として残り、誰かの心に静かに寄り添うことができました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。